

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 — 2022 年 (令和 4 年) —

古澤優 三浦美穂¹⁾ 吉野修司¹⁾ 藤崎淳一郎

Summary of the 2022 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Furusawa Yu, Miura Miho, Yoshino Shuji, Fujisaki Junichiro

要旨

2022 年に県内では全数把握対象 91 疾患中、25 疾患が報告された。疾患別では新型コロナウイルス感染症 (258,033 例)、結核 (123 例)、梅毒 (116 例)、腸管出血性大腸菌感染症 (66 例) の報告が多かった。梅毒は 2021 年に過去最も多い報告数 (89 例) となったが、それを上回る報告数となった。なお、新型コロナウイルス感染症は、令和 4 年 9 月 26 日から発生届の対象が限定され、報告方法が総数のみの報告へと変更¹⁾となった。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年の約 0.9 倍、例年の約 0.6 倍、全国の約 1.3 倍であった。眼科定点対象疾患の報告総数は、前年の約 0.7 倍、例年の約 0.3 倍、全国の約 2.4 倍であった。基幹定点対象疾患の報告総数は、前年の約 0.5 倍、例年の約 0.01 倍、全国の約 0.1 倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年の約 0.9 倍、例年の約 1.1 倍、全国の約 0.6 倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年及び例年の約 1.3 倍、全国の約 1.2 倍であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1994 年 (平成 6 年) から感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における 2022 年 (令和 4 年) の患者発生状況をまとめたので報告する。

指定届出医療機関 (以下「定点」という。) は、感染症発生動向調査事業実施要綱²⁾に基づき選定した (表 1)。

表 1 保健所別指定届出医療機関 (定点数)

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	4	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	58	36	6	7	13

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で定められた 116 疾患を調査対象とした。

企画管理課 ¹⁾ 微生物部

2 調査期間

全数把握対象疾患，定点把握対象疾患については 2022 年 1 週から 52 週まで，インフルエンザについては 2022/2023 年シーズンの 2022 年 41 週から 2023 年 14 週までをそれぞれ調査期間とし，診断日をもとに集計した。なお，新型コロナウイルス感染症については報告日をもとに集計した。

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった。

2) 二類感染症

結核 123 例が報告された。

a) 結核 Tuberculosis

報告数は 123 例で，前年（130 例）の約 0.9 倍であった。病型は，肺結核が 60 例，その他の結核（結核性胸膜炎，粟粒結核，頸部リンパ節結核等）が 28 例，肺結核及びその他の結核（粟粒結核，結核性脊椎炎）が 2 例，疑似症患者が 2 例，無症状病原体保有者が 31 例であった。宮崎市（70 例），都城（18 例），日南（11 例）保健所からの報告が多く，性別では男性が 66 例，女性が 57 例であった。年齢別では 70 歳以上が全体の約 7 割を占めた。

3) 三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症 66 例が報告された。

a) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告数は 66 例で，前年（29 例）の約 2.3 倍であった。患者が 42 例，無症状病原体保有者が 24 例であった。O 血清型別では，O26 が 34 例，O157 が 17 例，O103 が 2 例，O8，O15，O18，O74，O148 が各 1 例，不明が 8 例であった（表 2）。日南（29 例），宮崎市（15 例），都城（11 例），小林（5 例），日向（3 例），高鍋（2 例），延岡（1 例）保健所からの報告であった。年齢別では 0~4 歳が全体の約半数と多く，発生月別では，8 月が全体の約半数を占めた。また，2 件の集団発生事

例が報告されており，1 例目は日南保健所管内で 8 月に発生し O26 が多く報告され，2 例目は都城保健所管内で 9 月末から 10 月にかけて発生し O157 が多く報告された。

表 2 O 血清型別報告数

O 血清型	報告数
O26	34
O157	17
O103	2
O8	1
O15	1
O18	1
O74	1
O148	1
不明	8
計	66

4) 四類感染症

E 型肝炎 2 例，重症熱性血小板減少症候群（SFTS）10 例，つつが虫病 41 例，日本紅斑熱 12 例，レジオネラ症 5 例及びレプトスピラ症 3 例が報告された。

a) E 型肝炎 Hepatitis E

報告数は 2 例で，延岡保健所からの報告であった。年齢は 40 歳代と 60 歳代で，主な症状として，全身倦怠感がみられた。

b) 重症熱性血小板減少症候群

SFTS (Severe Fever with

Thrombocytopenia Syndrome)

報告数は 10 例で，宮崎市（6 例），日南（2 例），都城，延岡（各 1 例）保健所からの報告であった。性別は男性が 4 例，女性が 6 例で，年齢は 80 歳代が 5 例，70 歳代が 3 例，60 歳代が 2 例であった。主な症状として発熱，頭痛，筋肉痛，神経症状，腹痛，下痢，食欲不振，全身倦怠感，白血球・血小板減少，リンパ節腫脹，出血傾向，紫斑等がみられた。患者の発症時期は，2~12 月と通年を通して見られたが，特に 5 月に多かった。

c) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は 41 例で前年（72 例）の約 0.6 倍と減少した。小林（14 例），宮崎市（13 例），都城（7 例）保健所からの報告が多く，性別は男性が 24 例，女性が 17 例，年齢別では 70 歳代が全体の約

半数を占めた。主な症状として頭痛、発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹等がみられた。患者の発症時期は例年どおり冬季で、1月(2例)、2月、9月(各1例)、11月(23例)、12月(14例)の報告であった。

d) 日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は12例で、宮崎市(9例)、日南(2例)、小林(1例)保健所からの報告であった。性別は男性が7例、女性が5例、年齢は70歳代が5例と多く、次いで60歳代が4例、80歳代が2例、40歳代が1例であった。主な症状として発熱、頭痛、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常等がみられた。患者の発症時期は5月から10月であった。

e) レジオネラ症 Legionellosis

報告数は5例で、病型はいずれも肺炎型であった。宮崎市(4例)、延岡(1例)保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢は50歳代と70歳代が各2例、60歳代が1例であった。主な症状として発熱、咳嗽、呼吸困難、下痢、意識障害、肺炎等がみられた。

f) レプトスピラ症 Leptospirosis

報告数は3例で、宮崎市、都城、延岡保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢は70歳代が2例、40歳代が1例であった。主な症状として発熱、筋肉痛、結膜充血、黄疸、出血症状、蛋白尿、腎不全がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢2例、ウイルス性肝炎6例、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症9例、急性弛緩性麻痺1例、急性脳炎3例、クリプトスポリジウム症2例、クロイツフェルト・ヤコブ病1例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症3例、後天性免疫不全症候群4例、ジアルジア症1例、侵襲性インフルエンザ菌感染症2例、侵襲性肺炎球菌感染症10例、水痘(入院例)4例、梅毒116例、播種性クリプトコックス症6例、破傷風5例及び百日咳15例が報告された。

a) アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告数は2例で、病型はいずれも腸管アメーバ症で、宮崎市、日南保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢は40歳代と50歳代

であった。主な症状として下痢、粘血便がみられた。

b) ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告数は6例で、原因病原体はB型肝炎ウイルスが4例、C型肝炎ウイルスが1例、EBウイルスが1例であった。宮崎市(5例)、都城(1例)保健所からの報告で、性別は男性が5例、女性が1例であった。年齢は20歳代が2例、10歳代、30歳代、40歳代、60歳代が各1例であった。主な症状として全身倦怠感、嘔吐、褐色尿、発熱、肝機能異常、黄疸等がみられた。

c) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

Carbapenem-resistant *Enterobacteriaceae* infection

報告数は9例であった。原因病原体は *Klebsiella pneumoniae*, *Serratia marcescens* が各2例、*Enterobacter aerogenes*, *Klebsiella aerogenes*, *Enterobacter sp.*, *Escherichia coli*, 不明が各1例で、都城(4例)、宮崎市、延岡(各2例)、高鍋(1例)保健所からの報告であった。年齢は60歳代と70歳代が各3例、90歳代が2例、0~4歳が1例で、主な症状として尿路感染症、菌血症、肺炎、胆管炎、腸炎がみられた。

d) 急性弛緩性麻痺 Acute flaccid paralysis

報告数は1例で、原因病原体は不明であった。都城保健所からの報告であった。年齢は5~9歳で、主な症状として弛緩性麻痺(左右上肢)、深部腱反射低下、筋萎縮、髄液細胞数増加がみられた。

e) 急性脳炎 Acute encephalitis

報告数は3例で、原因病原体はヒトヘルペスウイルス6、ヒトヘルペスウイルス6疑い、病原体不明が各1例であった。宮崎市保健所からの報告で、年齢はいずれも0~4歳であった。主な症状として発熱、痙攣、意識障害がみられた。

f) クリプトスポリジウム症 Cryptosporidiosis

報告数は2例で、高鍋保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢は10歳代と20歳代であった。主な症状として腹痛、下痢、発熱等がみられ、いずれも動物からの感染が疑われた。

g) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は1例で、病型は古典型クロイツフェル

ト・ヤコブ病であった。宮崎市保健所からの報告で、性別は女性、年齢は 80 歳代であった。主な症状として進行性認知症、ミオクローヌス、無動性無言状態がみられた。

h) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infection

報告数は 3 例で、血清群は A 群、G 群、不明が各 1 例で、宮崎市保健所からの報告であった。年齢は 60 歳代が 2 例、90 歳代が 1 例であった。主な症状としてショック、肝不全、腎不全、DIC、軟部組織炎、中枢神経症状、全身性紅斑性発疹がみられた。

i) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は 4 例であった。病型は AIDS が 2 例(指標疾患：非ホジキンリンパ腫、ニューモシステス肺炎)、無症候性キャリアが 2 例であった。宮崎市保健所からの報告で、性別はいずれも男性で、年齢は 30 歳代と 40 歳代が各 2 例であった。感染経路は同性間性的接触 2 例、異性間性的接触、不明が各 1 例であった。

j) ジアルジア症 Giardiasis

報告数は 1 例で、日南保健所からの報告であった。年齢は 30 歳代で、症状は特になかった。

k) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

Invasive *Haemophilus influenzae* disease

報告数は 2 例で、宮崎市保健所からの報告であった。年齢はいずれも 70 歳代で、主な症状として発熱、ショック、肺炎、菌血症、多臓器不全がみられた。

l) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal disease

報告数は 10 例で、宮崎市 (7 例)、延岡 (2 例)、都城 (1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 7 例、女性が 3 例で、年齢は 60 歳代と 70 歳代が各 3 例、80 歳代が 2 例、20 歳代と 90 歳代が各 1 例であった。主な症状として頭痛、発熱、咳、全身倦怠感、嘔吐、意識障害、項部硬直、肺炎、髄膜炎、菌血症がみられた。ワクチン接種歴は接種有り、無しが各 1 例、不明が 8 例であった。

m) 水痘 (入院例) Chickenpox

報告数は 4 例で、病型は検査診断例が 3 例、臨

床診断例が 1 例で、日南 (2 例)、宮崎市、都城 (各 1 例) 保健所からの報告であった。年齢は 30 歳代、40 歳代、50 歳代、70 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱、発疹、肝炎等がみられ、1 例が他疾患入院中の発症であった。ワクチン接種歴は、無しが 1 例で、不明が 3 例であった。

n) 梅毒 Syphilis

報告数は 116 例で、前年 (89 例) を約 1.3 倍と上回り過去最多となった。病型は早期顕症 I 期が 50 例、早期顕症 II 期が 35 例、晩期顕症が 1 例、無症状病原体保有者が 30 例であった。宮崎市 (69 例)、都城 (27 例)、延岡 (11 例) 保健所管内からの報告が多く、性別は男性が 74 例、女性が 42 例で、年齢は 20 歳代が全体の約 3 割と最も多く、次いで 30 歳代と 40 歳代が約 2 割ずつを占めた。感染経路は異性間性的接触が 77 例、同性間性的接触が 4 例、性的接触 (異性間・同性間不明) が 15 例、不明が 20 例であった。主な症状として初期硬結、硬性下疳、鼠径部リンパ節腫脹、梅毒性バラ疹、丘疹性梅毒疹、扁平コンジローマ等がみられた。

o) 播種性クリプトコックス症

Disseminated cryptococcosis

報告数は 6 例で、宮崎市 (5 例)、延岡 (1 例) 保健所からの報告であった。年齢は 70 歳代と 80 歳代が各 2 例、30 歳代と 60 歳代が各 1 例で、主な症状として頭痛、発熱、意識障害、項部硬直、中枢神経系病変、真菌血症がみられた。

p) 破傷風 Tetanus

報告数は 5 例で、宮崎市 (2 例)、都城、延岡、日南 (各 1 例) 保健所からの報告であった。年齢は 80 歳代が 3 例、40 歳代と 60 歳代が各 1 例であった。主な症状として筋肉のこわばり、開口障害、嚥下障害、発語障害、強直性痙攣、易興奮性、反弓緊張がみられた。

q) 百日咳 Pertussis

報告数は 15 例と昨年 (2 例) の 7.5 倍と増加した。日向 (8 例)、延岡 (3 例)、宮崎市 (2 例)、都城、日南 (各 1 例) 保健所からの報告で、性別は男性が 2 例、女性が 13 例であった。年齢は 90 歳以上が 3 例、10 歳代、40 歳代、50 歳代、70 歳代、80 歳代が各 2 例、0~4 歳と 60 歳代が各 1

例で、ワクチンの接種歴は有り、無しが各 1 例、不明が 13 例であった。主な症状として持続する咳、夜間の咳き込み、呼吸苦、スタックート、白血球数増多、肺炎等がみられた。

6) 新型インフルエンザ等感染症

新型コロナウイルス感染症 258,033 例が報告された。

a) 新型コロナウイルス感染症

Corona-Virus Disease-2019

報告数は 258,033 例で、陽性者の居住地保健所別では、宮崎市保健所が全体の約 6 割を占め、次いで都城保健所が約 3 割、延岡保健所が約 2 割となった。年齢別では 10 歳代が 17%と最も多く、次いで 10 歳未満と 40 歳代が 15%ずつを占めた。また、週ごとの感染者数は図 1 のとおりであった。

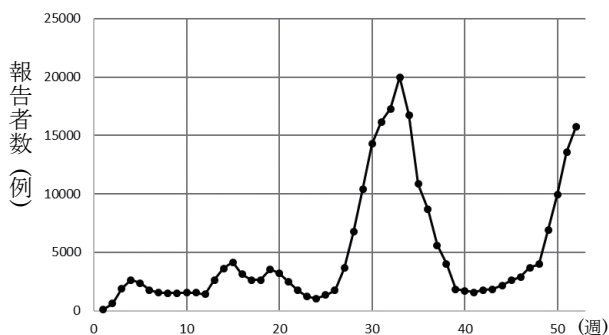


図 1 新型コロナウイルス感染症
週ごとの感染者数推移

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は 26,750 人、定点当たりの報告数は 635.9、前年の約 0.9 倍、過去 5 年間の平均値 (以下、「例年」という。) の約 0.6 倍、全国の約 1.4 倍であった。

各疾患の発生状況の概要は表 3、経時的発生状況は図 2 のとおりで、その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2022/2023 年シーズンの報告総数は 10,170 人、定点当たりの報告数は 175.3 で、例年の約 0.8 倍、全国の約 1.4 倍で、前年から大幅な増加となった (前年は 14 人、定点当たりの報告数 0.2)。延岡 (336.3)、日向 (212.0)、都城 (169.4) 保健所からの報告が多く、年齢別では 15 歳未満が全体

の 78%を占めた。

b) R S ウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は 2,204 人、定点当たりの報告数は 61.2 で、前年の約 0.5 倍、例年の約 0.9 倍、全国の約 1.6 倍であった。延岡 (107.0)、中央 (90.0)、宮崎市 (75.4) 保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月から 3 歳が全体の 82%を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は 491 人、定点当たりの報告数は 13.6 で、前年の約 0.6 倍、例年の約 0.4 倍、全国の約 1.7 倍であった。延岡 (22.0)、宮崎市 (19.7)、高鍋 (15.5) 保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月から 2 歳が全体の 79%を占めた。

d) A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は 762 人、定点当たりの報告数は 21.2 で、前年の約 0.3 倍、例年の約 0.2 倍、全国の約 1.3 倍であった。日南 (136.3)、中央 (19.0)、宮崎市 (14.8) 保健所からの報告が多く、年齢別では 2 歳から 5 歳が全体の 45%を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は 10,148 人、定点当たりの報告数は 281.9 で、前年の約 0.9 倍、例年の約 0.8 倍、全国の約 1.4 倍であった。中央 (379.0)、都城 (378.5)、小林 (378.0) 保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 3 歳が全体の 48%を占めた。

f) 水痘 Chickenpox

報告総数は 203 人、定点当たりの報告数は 5.6 で、前年の約 0.7 倍、例年の約 0.3 倍、全国の約 1.4 倍であった。日南 (11.3)、中央 (9.0)、都城 (7.8) 保健所からの報告が多く、年齢別では 2 歳から 5 歳が全体の 41%を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 1,478 人、定点当たりの報告数は 41.1 で、前年の約 0.4 倍、例年の約 0.4 倍、全国の約 0.8 倍であった。都城 (69.7)、日南 (64.0)、中央 (62.0) 保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 3 歳が全体の 81%を占めた。

h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は 24 人、定点当たりの報告数は 0.7 で、前年の約 0.7 倍、例年の約 0.1 倍、全国の約

1.1 倍であった。都城 (2.0), 宮崎市 (0.8), 高鍋 (0.8), 延岡 (0.3) 保健所からの報告で, 年齢別では 6 ヶ月から 2 歳が全体の 58% を占めた。

i) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は 1,009 人, 定点当たりの報告数は 28.0 で, 前年の約 0.8 倍, 例年の約 0.7 倍, 全国の約 1.9 倍であった。宮崎市 (36.2), 小林 (31.7), 延岡 (31.5) 保健所からの報告が多く, 年齢別では 6 ヶ月から 1 歳が全体の 90% を占めた。

j) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は 211 人, 定点当たりの報告数は 5.9 で, 前年の約 0.2 倍, 例年の約 0.1 倍, 全国の約 0.5 倍であった。日南 (12.0), 小林 (9.3), 都城 (7.3) 保健所からの報告が多く, 年齢別では 1 歳から 3 歳が全体の 70% を占めた。

k) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は 50 人, 定点当たりの報告数は 1.4 で, 前年の約 0.5 倍, 例年の約 0.1 倍, 全国の約 0.9 倍であった。中央 (6.0), 延岡 (4.5), 都城 (1.3) 保健所からの報告が多く, 年齢別では 4 歳から 9 歳が全体の 80% を占めた。

2) 眼科及び基幹定点対象疾患

眼科定点対象疾患の報告総数は 138 人, 定点当たりの報告数は 23.0 で, 前年の約 0.7 倍, 例年の約 0.3 倍, 全国の約 2.4 倍であった。

基幹定点対象疾患の報告総数は 1 人, 定点当たりの報告数は 0.1 で, 前年の約 0.5 倍, 例年の約 0.01 倍, 全国の約 0.1 倍であった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は 4 人, 定点当たりの報告数は 0.7 で, 例年の約 2.9 倍, 全国の約 2.5 倍であった (前年報告なし)。年齢別では 50 歳代が全体の 75% を占めた。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は 134 人, 定点当たりの報告数は 22.3 で, 前年の約 0.7 倍, 例年の約 0.3 倍, 全国の約 2.4 倍であった。年齢別では 20 歳代から 50 歳代が全体の 61% を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告はなかった。

d) 無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は 1 人, 定点当たりの報告数は 0.1 で, 前年の 0.5 倍, 例年の約 0.8 倍, 全国の約 0.2 倍であった。年齢は 10 歳代で, 原因菌は不明であった。

e) マイコプラズマ肺炎

Mycoplasmal pneumonia

報告はなかった。

f) クラミジア肺炎 Chlamydial pneumonia

報告はなかった。

g) 感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告はなかった。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は 441 人, 定点当たりの報告数は 33.9 で, 前年の約 0.9 倍, 例年の約 1.1 倍, 全国の約 0.6 倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は 274 人, 定点当たりの報告数は 39.1 で, 前年及び例年の約 1.3 倍, 全国の約 1.2 倍であった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は 259 人, 定点当たりの報告数は 19.9 で, 前年及び例年と同程度, 全国の約 0.7 倍であった。都城 (36.5), 延岡 (23.0), 日南 (20.0) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 4 割, 女性が約 6 割で, 年齢別では 20 歳代が全体の 55% を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpes simplex virus infection

報告総数は 65 人, 定点当たりの報告数は 5.0 で, 前年の約 0.5 倍, 例年の約 0.8 倍, 全国の約 0.6 倍であった。日南 (33.0), 高鍋 (7.5), 日向 (6.0), 宮崎市 (2.8) 保健所からの報告であった。性別は男性が約 2 割, 女性が約 8 割で, 年齢別では 20 歳代から 40 歳代が全体の 54% を占めた。

c) 尖圭コンジローマ Condyloma acuminatum

報告総数は 14 人, 定点当たりの報告数は 1.1 で, 前年の約 0.6 倍, 例年の約 0.7 倍, 全国の約

0.2 倍であった。日南 (2.0), 高鍋 (2.0), 宮崎市 (1.8), 日向 (1.0) 保健所からの報告であった。性別は男性が約 4 割, 女性が約 6 割で, 年齢別では 20 歳代が全体の 64% を占めた。

d) 淋菌感染症 Gonorrhoea

報告総数は 103 人, 定点当たりの報告数は 7.9 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 1.5 倍, 全国の約 0.8 倍であった。都城 (21.5), 延岡 (13.5), 高鍋 (5.0) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 7 割, 女性が約 3 割で, 年齢別では 20 歳代が全体の 50% を占めた。

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* infection

報告総数は 273 人, 定点当たりの報告数は 39.0 で, 前年及び例年の約 1.4 倍, 全国の約 1.3 倍であった。年齢別では 70 歳以上が全体の 69% を占めた。

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* infection

報告総数は 1 人, 定点当たりの報告数は 0.1 で, 前年の約 0.3 倍, 例年の約 0.2 倍, 全国の約 0.1 倍であった。年齢は 70 歳以上であった。

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant *Pseudomonas aeruginosa* infection

報告はなかった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち, 結核は 20 歳代から 100 歳代まで幅広い年齢層で報告された。病型で比較すると, 肺結核が全体の約半数を占め, 年齢別では 70 歳代以上が全体の約 7 割を占めた。また, 腸管出血性大腸菌感染症は, 前年の約 2.3 倍と報告数の増加が見られた。保育所での集団発生事例が 2 例報告され, 年齢別では 0~4 歳が全体の約半数を占めた (HUS の発症事例なし)。梅毒は前年の約 1.3 倍と増加し, 3 年連続過去最多を更新した。全国的にも年々増加傾向であり, 県内での報告数も増加しているため, 今後も動向に注意

する必要がある。また, 新型コロナウイルス感染症は, オミクロン株とその亜系統を主流とした第 6 波や第 7 波, 第 8 波 (ピーク直前まで) を含み, 過去最多の報告数となった。

定点対象疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は, 前年の約 0.9 倍, 例年の約 0.6 倍, 全国の約 1.4 倍であった。インフルエンザについて報告数は前年の 14 人を上回る 10,170 人, 定点当たりの報告数 175.3 となったが, 例年の約 0.8 倍とやや少ない報告数となった。また, 小児科対象疾患のうち, 前年及び例年と比較して報告数の多い疾患は見られなかった。

眼科定点対象疾患のうち, そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は, 例年の約 0.3 倍と少なかったが, 全国の約 2.4 倍と多く, 例年通りの傾向であった。

基幹定点対象疾患の報告数は前年の約 0.5 倍, 例年の約 0.01 倍, 全国の約 0.1 倍であった。無菌性髄膜炎以外の疾患は報告数が 0 となった。

月報告対象疾患の性感染症の報告数は前年の約 0.9 倍, 例年の約 1.1 倍, 全国の約 0.6 倍であった。性器ヘルペスウイルス感染症は 20 歳代から 40 歳代に多く, それ以外の疾患は 20 歳代に多く認められた。また薬剤耐性菌感染症は前年及び例年の約 1.3 倍, 全国の約 1.2 倍であった。

本調査結果から, 疾患によって流行発生時期や地域差, 年齢差等があることが分かった。今後も引き続き, 感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い, 感染症の発生動向に細心の注意を払うとともに, 幅広い世代に適切な情報の提供と感染予防の啓発を行っていく必要があると考えられる。(備考)

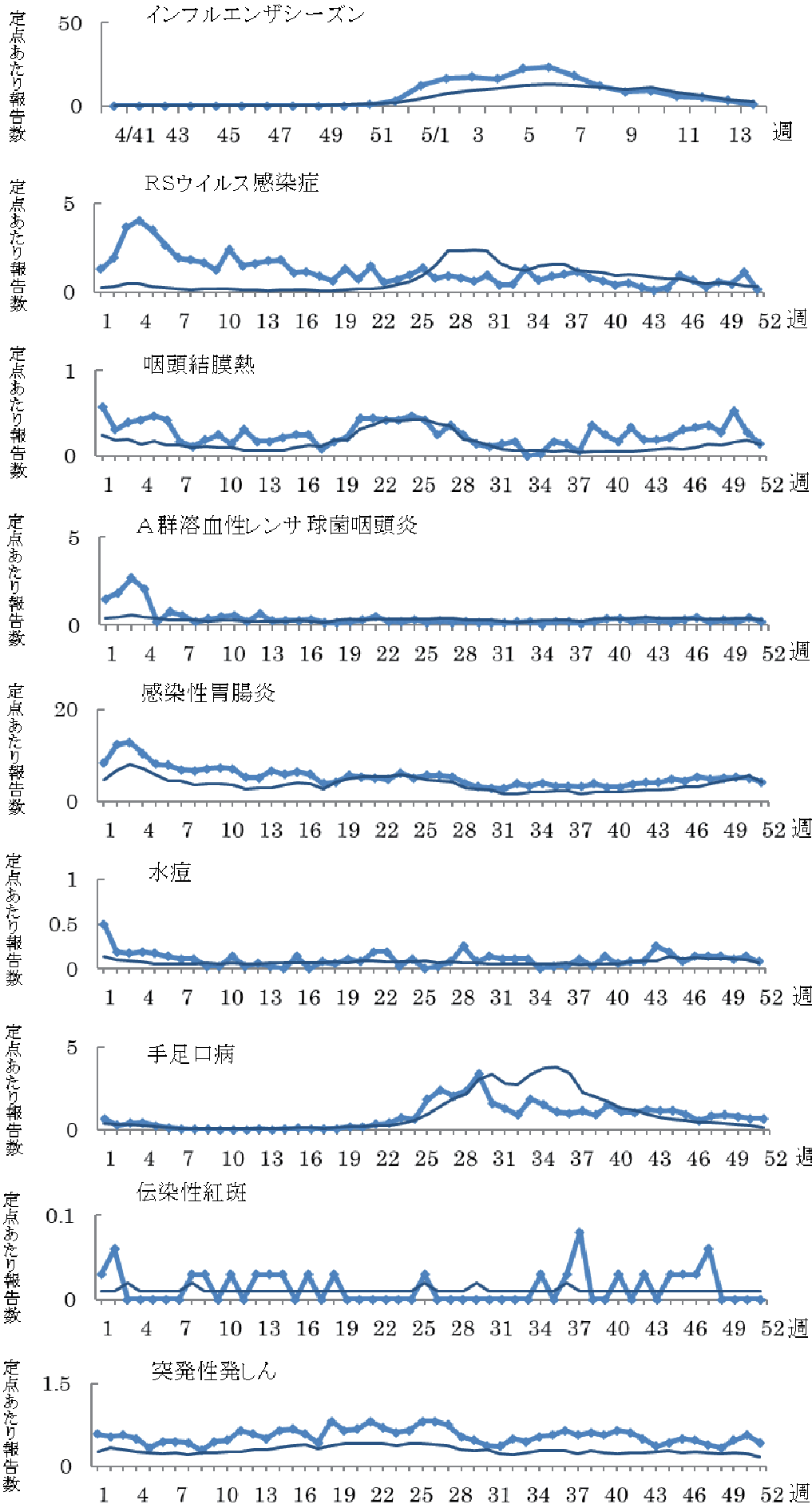
感染症発生動向調査事業は, 患者情報と病原体情報から構成されており, 当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

文献

- 1) 厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策推進本部事務連絡: With コロナの新たな段階への移行に向けた全数届出の見直しについて, 令和 4 年 9 月 22 日。

2) 厚生労働省保健医療局長通知：感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施につい

て，平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号.



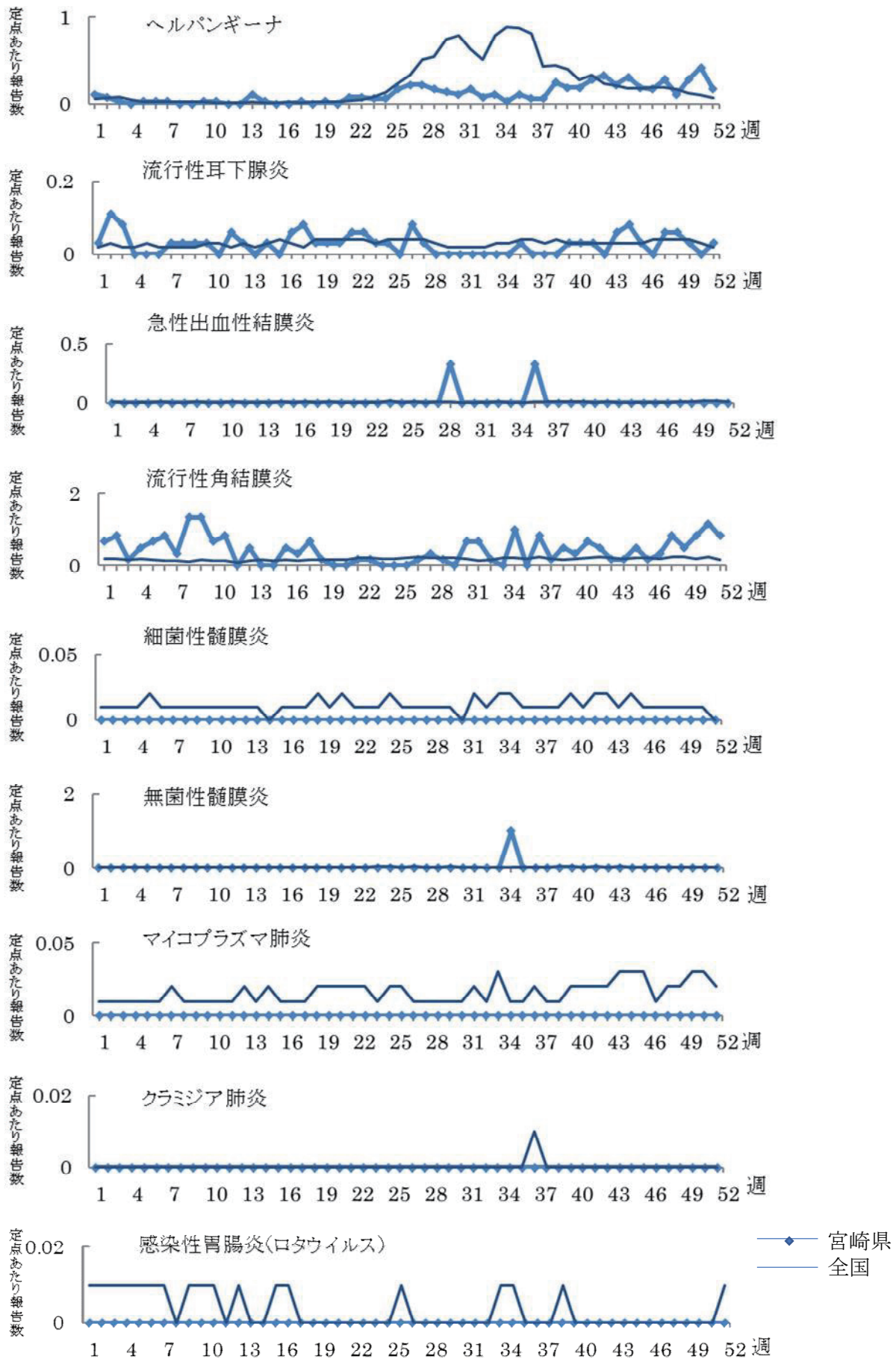


図 2 定点把握対象疾患（週報告対象）の定点あたり報告数の週推移（経時発生状況）

表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要(宮崎県, 2022年)

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合		昨年比 (県内2021年) (%)	過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2022年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)			
インフルエンザ	10,170	175.3	15歳未満	78	72643	80	136
RSウイルス感染症	2,204	61.2	6ヵ月～3歳	82	52	88	160
咽頭結膜熱	491	13.6	6ヵ月～2歳	79	62	36	169
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	762	21.2	2歳～5歳	45	29	19	126
感染性胃腸炎	10,148	281.9	1歳～3歳	48	94	75	144
水痘	203	5.6	2歳～5歳	41	73	32	141
手足口病	1,478	41.1	1歳～3歳	81	40	37	81
伝染性紅斑	24	0.7	6ヵ月～2歳	58	67	5	111
突発性発しん	1,009	28.0	6ヶ月～1歳	90	82	71	187
ヘルパンギーナ	211	5.9	1歳～3歳	70	17	14	48
流行性耳下腺炎	50	1.4	4歳～9歳	80	45	11	88
急性出血性結膜炎	4	0.7	50歳代	75	—	286	247
流行性角結膜炎	134	22.3	20歳代～50歳代	61	68	26	238
細菌性髄膜炎	0	0.0	—	—	0	0	0
無菌性髄膜炎	1	0.1	10歳代	100	50	83	16
マイコプラズマ肺炎	0	0.0	—	—	0	0	0
クラミジア肺炎	0	0.0	—	—	0	0	0
感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)	0	0.0	—	—	0	0	0
性器クラミジア感染症	259	19.9	20歳代	55	102	103	65
性器 ヘルペスウイルス感染症	65	5.0	20歳代～40歳代	54	52	81	56
尖圭コンジローマ	14	1.1	20歳代	64	56	69	18
淋菌感染症	103	7.9	20歳代	50	110	150	78
メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌感染症	273	39.0	70歳以上	69	136	135	127
ペニシリン耐性 肺炎球菌感染症	1	0.1	70歳以上	100	33	23	10
薬剤耐性緑膿菌感染症	0	0.0	—	—	—	0	0